

琉球大学学術リポジトリ

学校安全と危機管理に関する一考察： 異校種合同研修からみる成果と課題

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教職センター 公開日: 2020-04-06 キーワード (Ja): キーワード (En): school safety, risk management, joint training 作成者: 下地, 敏洋, 多和田, 実, Shimoji, Toshihiro, Tawada, Minoru メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/45031

学校安全と危機管理に関する一考察

－異校種合同研修からみる成果と課題－

下地敏洋¹・多和田実²

A Consideration for School Safety and Risk Management :
Effectiveness and Issues of Joint Training for Teachers from Different School Species

Toshihiro SHIMOJI · Minoru TAWADA

Abstract

Purpose of the Study: The authors consider the effectiveness and the issues of joint training for teachers from different school species through the case studies of the teaching license renewal course in Okinawa.

Design and Methods: The teachers were grouped into eight groups of three to six members based on school species and discussed the two case studies and a representative of each group gave presentation. They also wrote their experiences on school safety and the risk management in their schools they work.

Results: Teachers' responds and preventions to heat strokes of students during extracurricular activities are categorized into several classification based on school species. Teachers' behavior to secure safety at schools are categorized into 5 such as safety check, security guidance, information sharing among teachers, and so on. However, the number of answers and the types of classifications are different based on school species. Teachers attended evaluated the joint training as useful and meaningful because they studied many different ideas.

Implications: The school safety and the risk management are essential training for teachers to give their students chances to enjoy school life and teachers should pay much more attention to school safety. To secure students' safety, the joint training is useful to get many different ideas.

Key words : school safety, risk management, joint training

1. はじめに

学校において、児童生徒は常に安全で、かつ安心して学べる教育環境を保障されなければならない。学校保健安全法（2015）の第一条で示すとおり、学校における「教育活動が安全な環境において実施される」こと、及び「児童生徒等の安全の確保が図られる」ことが重要である。このことは、学校には管理下にある児童生徒の安全保持義務の観点から、その生命及び身体の安全の確保に対して、責任が伴うことでもある。特に、安全の確保は、児童生徒が学校教育活動全体を通して、基礎学力を定着させ、信頼できる人間関係を構築し、個々人の能力や可能性を開花させることが、生涯発達の原動力になると考えられる。

¹ 琉球大学大学院教育学研究科高度教職実践専攻

² 琉球大学教職センター

学校で事件や事故等が発生した時、教職員、生徒、保護者、関係者が迅速かつ的確に対応する体制や環境が確立されていることが重要である。そのような状況下において、その影響を最小限に食い止めることができ、児童生徒が安心して日々の教育活動に取り組むことにつながると考えられる。渡邊（2013）は、「安全な社会を実現することは、すべての人々が生きる上で最も基本的かつ不可欠なこと」と述べ、安全は社会の安心に不可欠な要件であることを指摘している。このことは、学校教育現場においても例外ではない。どのような状態を安全と定義できるのだろうか。

渡邊（2013）は、安全を「事件・事故及び災害（被害）の脅威を感じることもない状態」と定義し、「災害をもたらす事件・事故の発生を防止することが、安全を確保する上で最も重要である」及び「万が一事件・事故が発生した場合でも、被害の発生や拡大を防ぐことができる状態」と述べ、学校における安全を考える上で、この2点が重要であると述べている。

わが国において、地震・津波、台風、集中豪雨などの自然災害が頻発する中、近年は甚大な災害が相次いでいるため、学校においても児童生徒へ注意喚起を行い、安全確保に努めているのが現状である。日ごろから迅速かつ確かな情報収集に努め、それらの分析を踏まえて判断を行い、適宜児童生徒への指導等状況に応じた円滑な対応をするため、管理者を中心に全教職員が組織として機能することが重要である。

実際、幼・小・中・高校の校種を問わず、幼児児童生徒が巻き込まれる事件や事故は多発傾向にある。特に、中学や高校では、早朝及び放課後の部活動や講座等のため、早朝登校や夕暮に帰宅する生徒の安全確保については、十分な対応がみられないケースもあるのが現状である。実際、課外活動中及び登下校時等において、時間帯や場所を問わず、校内外のいたるところで事件や事故が発生している。

文部科学省（2016）は、学校の管理下における様々な事故や不審者による児童生徒等の切りつけ事件、自然災害に起因する死亡事故など重大事件・事故災害が発生している状況を踏まえ、各学校及び学校の設置者等に対して、危機管理マニュアルの見直し・改善を図るよう事件・事故災害の未然防止及び事故発生時の適切な対応について通知を行った。この中で、学校の危機管理に関して、教職員は事件・事故等の未然防止及び事後対応で生徒の生命を守る重要な立場にあることが明記されている。

しかしながら、教職員と保護者、教職員と生徒、生徒同士の間トラブルが発生し、裁判に発展するケースも見られる。そのため、普段からの生徒、保護者との信頼関係の構築、及び情報収集を行い、危機管理意識、その対応の充実を図るための職員研修の実施等、その方策にも様々な広範囲にわたっているのが実情である。

このように踏まえ、日常の学校教育活動全般において、学校安全や危機管理の視点に立ち、状況把握及び事件・事故の未然防止に努めることは重要である。特に、対応策のシミュレーションは、リスク・マネジメント及びクライシス・マネジメントの上からも重要である。

そこで、普段情報交換をする機会の少ない異校種の教職員が一堂に会し、学校安全と危機管理について情報交換をすることは、幼児児童生徒の心理的特徴及び対応の在り方について理解を深め、幼小中高校相互の安全管理と危機管理について理解を深めることに有効であると考えた。

本稿の目的は、沖縄県内における「学校安全及び危機管理」の現状と課題について、幼小中高校の教職員が共通理解を深め、異校種合同研修のメリットについて検討することである。

2. 教員免許状更新講習「学校安全と危機管理」（選択必修）について

- (1) 講習名：学校安全と危機管理－組織的対応の重要性－
- (2) 到達目標：教育の最新事情をもとに、今日求められている学校安全と危機管理の課題及

び学校における対応並びに指導のあり方を理解する。

- (3) 講習内容：「学校安全・危機管理の概要」では学校安全の意義とその目標、「生徒を取り巻く危険と事件・事故」では生徒の発達と事故・障害の特徴及び生徒が巻き込まれる事件・事故、「学校安全・危機管理の進め方」では学校安全管理の実際、「学校安全・危機管理における教職員の役割」では教職員の危機管理能力の向上、について概説及び演習を行う。

3. 研究方法

- (1) 対象者：平成30年度教員免許状更新講習において、学校安全と危機管理を受講した31名（男性10名、女性21名）であった。校種別では、保育園8名（男性0名、女性8名）幼稚園3名（男性0名、女性3名）、小学校2名（男性0名、女性2名）、中学校1名（男性0名、女性1名）、特別支援学校1名（男性0名、女性1名）、高校16名（男性10名、女性6名）で、内訳は普通科9名（男子6名、女子3名）、専門高校7名（男性4名、女子3名）であった。
- (2) 実施日：平成30年7月27日（金）
- (3) 会場：沖縄県立宮古高等学校家庭科室
- (3) 内容及び形態：次の通りであった。
- ①学校安全・危機管理の概要（講義・グループ討議・発表）
 - ②子どもを取り巻く危機と事件・事故（講義・グループ討議・発表）
 - ③学校安全・危機管理の進め方（講義・グループ討議・発表）
 - ④学校安全・危機管理における教職員の役割（講義・グループ討議）
 - ⑤ケーススタディ：価値観の相違からくる苦情（講義・グループ討議・発表）
 - ⑥質疑応答・まとめ
 - ⑦筆記試験
- (4) 実施方法
課題に対するグループ討議及び発表内容並びに個々人の記載内容をまとめる。1グループ3～6名で、校種別に8グループに編成した。講師（著者）が内容について導入説明を行い、その後現状と課題についてグループで討論を行った。その後、各グループ代表がグループの討議内容等をプレゼンテーションし、その内容等について全体で質疑応答と指導助言を行った。

4. 結果

- (1) 課題1：「部活動中の熱中症の発生を防ぐための注意点を挙げなさい。」
各グループの発表内容を纏めると次のとおりであった。

【保育園】

- ①水分・塩分補給に関する内容（2件）
「適当な水分補給（水筒持参）」等。
- ②体調管理に関する内容（2件）
「健康チェック」、「それぞれの子どもの体調チェック（朝 or 活動前）」。
- ③練習時間や場所などの工夫に関する内容（5件）
「時間を決める（活動時間）」、「（散歩は）午前10時～11時」、「気温の高い時は（散歩を）控える）」、「休憩（10～15分）」等。
- ④温度管理・環境に関する内容（8件）

- 「日よけでテントを立てる」, 「水かけ（芝生, 砂場, コンクリート等）」, 「シャワー」, 「室内の空調管理」, 「クーラーをかけて温度を調整する」, 「静と動の活動のバランス」等。
- ⑤家庭との連携・協力に関する内容（2件）
「保育だよりの発行」, 「生活リズムチェックシート」。

【幼稚園】

- ①水分・塩分補給に関する内容（3件）
「こまめな水分補給, 塩分・ミネラル」等。
- ②体調管理に関する内容（3件）
「スキンシップを多めにして, 体温を確認」, 「暑い夏休みのみ, 4・5才児もお昼寝の時間」, 「体調が悪い時は, 自分からも言えるように（普段からのコミュニケーションを良くする）」。
- ③練習時間や場所などの工夫に関する内容（2件）
「日陰で遊ぶ, 作る」, 「外で遊ぶ時間帯を決める」。
- ④温度管理・環境に関する内容（1件）
「木遊びを保育の中に取り入れる」。
- ⑤（練習時の）服装に関する内容（1件）
「帽子, 衣類, 着替え」。

【小・中学校】 ※参加人数が少ないため, 合同で実施した。

- ①水分・塩分補給に関する内容（1件）
「水分補給」。
- ②体調管理に関する内容（4件）
「食事・睡眠をしっかり取る（体調を整える）」, 「こまめな健康観察」, 「子どものその日の体調を等の確認」, 「普段から自分の気持ちを伝えられるように」。
- ③練習時間や場所などの工夫に関する内容（2件）
「時間帯（休みの確保）」, 「動き過ぎないように配慮・声掛け（休憩時間をこまめにとる）」。
- ④温度管理・環境に関する内容（1件）
「安全場所の確保（倒れた時に対応する場）」。
- ⑤（練習時の）服装に関する内容（1件）
「服装に気を付ける（通気性の良いもの, 着替え, 帽子等）」。
- ⑥家庭との連携・協力に関する内容（1件）
「保護者との連絡（事前に体調がどうかの確認）」。
- ⑦熱中症についての知識に関する内容（1件）
「熱中症についての理解（学習）」。

【高校】

- ①水分・塩分補給に関する内容（22件）
「水分の補給だけでなく, 塩分もしっかり補給する」, 「水分, ミネラルの摂取」, 「（こまめな）水分補給」, 「水分を取りやすい環境づくり: 水筒を持参, 冷水器の設置」, 「水分補給を確実にしてもらおう: 個人の判断に任せるのではなく, 時間を確保して取らせる」, 「適時, かつ強制的に水を取らせる」, 「マネージャーに指導させる（観察者を増やすため）」等。
- ②休憩に関する内容（4件）新しい項目
「練習メニューの変更」, 「練習メニュー量と休みの適切なバランス」, 「状況に応じて, 休憩時間をとる」, 「休憩」。

③体調管理に関する内容（21件）

「こまめな健康観察」、「開始時からの様子観察」、「日頃から栄養摂取や睡眠時間の確保を指導する」、「観察と対話：睡眠と食事の状況を把握」、「食事（栄養）とバランスをよく取る」、「（練習時の）健康観察」、「体調」、「生徒の表情をよく見ている」、「声掛けを丁寧に行う」等。

④練習時間や場所などの工夫に関する内容（16件）

「涼しい時間にやる」、「天候によっては、活動の内容、練習メニューを再検討して実施する」、「夏期活動時は、休憩時間を少し多めに設けたり、こまめな水分、塩分を補給する」、「1時間以上継続した活動はしない」、「休憩の確保」、「こまめな休憩を計画的に取り入れる」、「日陰で行うメニューを考える」等。

⑤温度管理・環境に関する内容（8件）

「こまめな換気」、「通風」、「（熱中症の疑いがある場合）涼しい場所への移動」、「室内温度に気を付けること」、「風通しへの配慮」、「換気のため、大きな扇風機を用いて体温・室温の上昇を防ぐ」等。

⑥（練習時の）服装に関する内容（8件）

「帽子をかぶる」、「（部活練習中の）服装」、「日焼け対策」、「サングラス（の活用）」、「こまめな着替え」、「熱中症が起こった場合（疑いがある場合）衣類を緩める」等。

⑦監督やコーチなど指導者の注意点に関する内容（7件）

「中断させる勇氣」、「常に指導者側の認識」、「指導者の情報収集：熱中症対策に関する知識を身につける（新しい情報収集）」、「（熱中症の時）対話による意識確認」、「計画を柔軟に」、「指導目的は何か？－暑いから止めようと言えるように」等。

⑧家庭との連携・協力に関する内容（6件）

「前日の睡眠をしっかり取る」、「保護者からの情報収集：朝食の有無、睡眠時間など」、「栄養管理指導」、「日常生活における食事のバランス、睡眠の取り方」、「生活習慣の乱れも体調」等。

⑨情報共有に関する内容（2件）

「緊急連絡」、「保護者への連絡」。

⑩熱中症についての知識に関する内容（1件）

「講習会等で熱中症の怖さを理解させる（未然防止、生徒同士でも観察できるように）」。

(2) 課題2「自分の日常生活の中で、安全を確保する活動を探し、具体的な例を挙げなさい。」活動及び発表内容は、課題1と同様であった。

【幼稚園】

①安全の点検に関する内容（13件）

「園庭は毎日、職員が危険はないかチェックしている（芝生は裸足で遊んだりするため）」、「安全チェックリストの記入、確認（月毎）、遊具等（毎日）」、「施設、設備に関する定期点検の実施」、「落下物防止（棚の上においてあるものを固定する）」、「遊具のチェック：使い方、遊び方を伝える」等。

②子どもに対する安全に関する内容（23件）

「毎日、朝、登園の際、駐車場まで保育士が子どもを迎えに行く。混雑時の子どもの安全確保の為」、「防犯カメラの設置：玄関前、保育室等」、「子どもの健康チェック（検温測るとか）」、「登降所調べ：誰と来て、誰と帰ったか」等。

③職員の情報共有に関する内容（8件）

「苦情（意見・要望）：保護者の視点で書いてもらい、見落とししていた問題点を発見できる機会となることがあり、早期対応を心がけている」、「不審者、台風：不審者の場合は合言葉を決めておいて、職員間で確認し合う」、「食の安全：原産国チェック、添加物、アレルギー」等。

④連携・協力に関する内容（14件）

「保護者の事前連絡：緊急時の対応及び避難先の周知、引き渡しカードを4月に書いてもらう」、「登園時や降所の時には、保護者に時間など（を）記入してもらっている」、「地域との連絡会（自治会など）でコミュニケーションをとる。例）不審者対応、災害時、避難場所の確認など」、「防災、危機管理体制を保護者に周知」等。

【幼稚園】

①安全の点検に関する内容（8件）

「クラスごとに防犯カメラ（園長室からいつでも見られる）」、「全クラスが見えるようなお部屋づくり。ガラスは分厚い」、「物の場所の把握」、「朝、通学路の旗」等。

②子どもに対する安全に関する内容（11件）

「遠くからも変わる体育着、カラー帽、園バック」、「（危険）全てを取り除くのではなく、子どもの意識を高める言葉掛け。考える時間（の確保）」、「仰向けに昼寝、SIDSチェック」、「刃物 etc. 危険を伴う可能性のある道具を年齢に合わせて高い手の届かない所に置いたり、子どもに使い方や注意をしっかりとした上で渡したりする」等。

③職員の情報共有に関する内容（8件）

「子どもの人数確認（移動のある活動ごと）」、「遊具・用具の点検、修繕（でも対応してくれない、遅い）」、「職員全員で園舎・園庭の危険予知・確認」、「職員同士での危険予知に対する言葉掛け」、「園舎・園庭での子どもたちを見る意識を高める。場所決め」等。

【小・中学校】

①安全の点検に関する内容（3件）

「安全点検（毎月1回、教室、壁、外ブロック等学校内の施設の点検）」、「安全マップ作り（地域の鋼板や子ども110番の家の場所確認）」、「教室内で避けるルート（方法）を確認」。

②子どもに対する安全に関する内容（6件）

「熱中症対策（水分補給、帽子）」、「交通安全教室（横断歩道の渡り方）」、「登下校の安全指導（体調、マナーの確認）」、「避難訓練（地震、不審者、火事）」等。

③職員の情報共有に関する内容（2件）

「教育相談（学期ごとに1回、教師と子どもと個人面談）」、「アレルギー対応（給食、弁当持参、除去食）」。

④連携・協力に関する内容（5件）

「不審者情報の共有（委員会、警察から情報がくるのでそれを子どもたち、保護者に連絡する）」、「夜間パトロール（夏休み、PTAと実施）」、「地域と連携した避難訓練（高台まで逃げる）」、「ケガ・事故が起こった際の連絡網（発見者一対応：119番通報、保護者連絡等）」、「AED講習（職員、部活指導者、PTA）」。

【高校】

①安全の点検に関する内容（13件）

「使用教室内に危険個所がないかの確認（破損物等）」、「月1回の安全点検」、「校

舎のコンクリートの剥離など、劣化していないか?」,「教室の掲示物の突起物等のチェック」,「学校正門など入口の管理(外部者の侵入)」等。

②生徒に対する安全に関する内容(13件)

「生徒の登校時、下校時に注意喚起(イヤホンして自転車に乗らない等)」,「実習時における生徒の安全の確保」,「過呼吸や熱中症への動線の確認」,「体験学習」等。

③職員の情報共有に関する内容(25件)

「言葉遣いへの注意喚起」,「不審者情報一斉メール」,「心肺蘇生法に関する講習」,「他施設移動の時の交通整理」,「豪雨に対する担任対応」等。

④連携・協力に関する内容(26件)

「朝ラン時のコースにある危険物、植物の撤去」,「登下校時の「P」の方々による交通整理とあいさつ運動」,「朝の横断歩道での声掛け」,「夜間パトロール」,「防災避難訓練(津波、火災)」等。

⑤熱中症対策に関する内容(7件)

「熱中症予防(水分補給、室温管理)」,「部活動中、熱中症などの未然防止のための生徒の体調管理」,「校内陸上競技大会の中止」等である。

⑥教科に関する内容(41件)

「調理(実習前の安全教育):火の安全確保(火事等)、包丁の使い方、やけどの注意、調理器具の使い方(切り傷、擦り傷)」,「薬品管理の徹底」,「船の上架、下架時の作業の安全確保」,「農業実習:こまめに水分を取る、農具の手入れや使用方法の確認」,「農場・施設:農業機械の点検、農場の整備」等。

(3)受講者に記載してもらった「危機管理でうまく対応できたこと」の内容は次のとおりである。

【保育園】

- ①朝の子どもの様子を見ていて、普段と違うことに気づき休ませていた。しばらくすると38°Cまで発熱していた。無理をさせず、すぐに保護者に連絡できて良かった。
- ②子どもは、いつどこで何をするかわからない。一つ動けば、周りに危険は発生する。小さければ小さいほど保護者は、責任をもって子どもと接する。環境の安全、衛生面、食の安全、遊具の安全、トイレの掃除の後(に)床を拭くことで、子どもが滑ってぶつけてけがをしない。おもちゃを片付けることで、呑み込みの事故を防ぐ、ドアのクッション柵、いろいろ考えられる。
- ③マニュアル通りにできるよう、職員や地域との連携を取り組み落ち着いて対応できたこと。
- ④子どもが園で安全に過ごせるように、あらかじめ保育室内に危険なところはないか確認して、柵やガードをつけるなどケガがないよう対応している。又、体調面でも健康に過ごせるよう室内の気温調節などにも気を付けクーラーを入れたりしている。水分補給も行っている。
- ⑤連絡がなかなか取れない保護者がいたので、どうすべきか職員で話し合いをもった。
- ⑥以前、受け持っていた子どもが、アレルギーを起こしてしまった時に、時間外保育中のため、現担任は不在だったが、その子にアレルギーがあるのを知っていた私はその日のおやつを思い出し、食べてしまったかを聞いて、アレルギー反応の原因を見つけ、大事に至ることはなかった。
- ⑦保育中、震度3の地震があり、子どもたちを混乱なく指導できた。日頃から避難訓練をして、身体で覚えさせていたため動くことができた。危険を感じた時は、本当にこわいけど、大人が落ち着いて行動することが大事だと思った。

【幼稚園】

- ①0歳児を担当していた時に口に物を入れようとする時期があり、小さなおもちゃを取り除いたり、厚めの紙の絵本を用意したり、危険と思われるハサミ等の道具を高い位置に置いたり等こまめに配慮することで誤飲を防ぐことができた。
- ②野外での活動が多く、園庭で遊びに夢中になる子が多い。熱中症も気になるので、体調が悪いときには自分で伝えられるよう指導している。その日も園庭で遊ぶ予定をしていたが、男児が体調の悪さを訴えてきた。具体的に知りたかったので「頭の痛さはどんな痛さ？ぎゅーっと押されて痛い？ガンガンひびいて痛い？」など子どもにわかりやすい言葉を選んで聞いたところしばらく考えて「ガンガン痛い」と言ってきた。休憩をとってその後も体温を計ったり水分補給で対応し、早退させた。5才児なので上手く自分のことを表現できない部分もあるが、保護者が言葉を選んで分かりやすく子どもに言ってもらえたことで、対応できたと思う。
- ③こども達が危険な遊び方をしていた時や保育室を走り回っていた際、本人に危険がある事を言葉掛けし、後から理解できているか確認をした際、皆が危険である事をきちんと理解出来ている発言をし、気を付けていたこと。

【小・中学校】

- ①不審者の情報が子どもから担任へ伝達できたこと。
- ②交通事故等に巻き込まれる情報が地域から入り、守れた。
- ③体育の授業中に、体育館で跳び箱遊びをしていた。体育館での活動なので、熱中症にならないだろうと思い、そのまま1時間の授業を終えた。その体育の授業にずっと走りっぱなしで遊んでいた児童だったが、次の授業ではほとんどがぐったりしていた。熱中症気味だったんだと感じ、体育の時間は水分補給をするよう声掛けをするようになった。すると、誰もぐったりすることはなくなったので、上手く対応できたと思う。
- ④学校の遊具が危険ということで、保護者から連絡があった。自分だけで対応せず、まずは管理者に報告し、毎月の安全点検結果を確認し、担当で話し合いをもった。壊れそうな箇所には修理が入り、なおるまでは使用禁止になった。この結果を学級指導で子どもに伝え、保護者にはお便りでの連絡を行った。保護者も安心してくれたことがある。
- ⑤豪雨時における担任としての保護者と連携、雨雲レーダーでの情報収集、保護者への連絡、引き渡し票を作成し、引き渡し時間の確認など。

【高校】

- ①実習教諭として、日頃から家庭科や理科の実験実習時には、安全第一を何よりも徹底している。刃物や火を使うので、机間巡視（指導）や声掛けをしっかりと行う。準備する段階で、予測できる危険は除去する、など。また万が一事故が起きた場合を想定してすぐ手の届く場所に救急箱を置いておく、消火栓は定期点検チェックするなど、なども徹底している。今のところ、大きな事故を起こしたことはない。今後も継続して取り組む。
- ②クラスの男子がじゃれて、ケガにつながりそうな場面が目についたため、LHR時に、事件・事故の発生について調べ学習を行い、日頃のこういった行動が、今後、事件・事故につながりそうか、という授業を行った。本人たちも気づきがあって、それ以降ケガにつながりそうな軽率な行動が減少した。
- ③台風対策等、窓の補強や飛来物がない様、周辺の安全点検、ガラス窓の周りにタオルを敷いたり、雨の浸水を防ぐ等の対策。
- ④登下校時や校外（地域の公園で少し危険な場所であること）への注意を日頃から生徒に伝えていること。イヤホンをしながら歩かない等防犯面に関する意識づけ。

- ⑤まずは管理者への報告・連絡・相談を迅速に行ったことで、初期段階で誤った対応をせず、問題の悪化が防げた。生徒や保護者の不信感を増すような発言を控えたこと。
- ⑥最近 LINE 等 SNS の普及や個人情報管理の面でクラスの連絡網が作りづらいので、クラスの LINE グループ+個別 LINE を回す順番を決めての連絡網を作成して守るよう指示したところ、台風時の、緊急連絡網が全員にスムーズにまわった。ケースバイケースだとは思いますが複数の方法をとれるような準備をしておいてよかった。
- ⑦東北大震災時に、修学旅行の引率をしていたのですが、旅行前に行っていた、全体行動やリーダーによる人数確認、グループ毎の行動を義務付けることにより、震災時に生徒自身が考えて行動していた。
- ⑧出勤し、薬品庫をチェックすると、水酸化ナトリウムが薬品便から噴き出していた。定期的なチェックで見つけることができ、幸いにも被害はなかった。しかし、“噴き出さない保管”をもっと研究していく必要がある。
- ⑨部活動指導において、練習前に練習中の注意喚起したことで、未然防止と早期発見、対応ができ大事にならずに。少しの休憩で危機に対応することができた。(高校)
- ⑩体育の授業中、足首を捻挫した生徒に対し、RICE 処置を行い、その後、病院での受診を勧めることができた。
- ⑪仕事内容が機械を使用した実習が多いため、危機管理でいうと未然防止に力を入れている。工場内の整理や通路(地面)に物を極力置かない等の対策した結果、工場内でも躓き、転倒からくるケガに関してはほぼなくなっている。何らかのケガがあった場合には、養護教諭・管理者への連絡はもちろん職員間で情報共有を行っている。
- ⑫熱中症や過呼吸で倒れる生徒を対応してきたが、養護教諭との連携や事前に家族と情報交換を密に行っていたため円滑に対応できた。日頃からの対応の準備が重要である。
- ⑬東日本震災の際、東京の保育園で震度5を体験し、落ち着いて子どもたちの安全を確保したことで恐怖心を子どもに与えずに済んだ。現在も避難訓練の際はまず自分が落ち着いて、冷静な判断で子どもの安全を考えるようにしている。
- ⑭危機発生時の初期の段階で、管理者と相談し、対応したことが、指導上(交通事故等)で上手く対応できた。
- ⑮授業で使用する施設が壊れてしまったので、そこで生徒が授業をおこなうことを一時中断した。管理者や関係する業者と連携し、修繕を早急に行ってもらえたので、授業を再開。事故・ケガも起こることなく年間の活動を終えることができた。
- ⑯日頃、部活動の顧問としてテニスを指導している。自身の健康について管理するのも活動の一つであることを意識させているため、熱中症などの症状を出さずに活動できている。
- ⑰生徒が農業実習の時に誤ってカマで足を切ってしまう、かなりの出血をしたが、養護教諭や管理者、担任との連携を上手くとることができたので、大きな問題にならなかった。

5. 考察

学校は、生徒にとって安全・安心な場所であることが一番大切なことであるが、現実はいじめや自殺など交友関係のトラブル、事故、不審者侵入、さらに不登校など多くの課題がある。そのため、生徒を守る立場にある教職員の危機管理に対する力量は重要である。時代の変化とともに、対応する危機管理の在り方や求められる知識も変化しており、常に意識を持ち、研修等を通してスキルアップを図る必要がある。研修等の内容では、部活動に役立つスポーツ心理学や医学に関する知識等も提供することも効果的であると考えられる。

文部科学省(平成28年5月20日)は、各都道府県関係課長あてに「熱中症事故の防止につ

いて(依頼)」を通達している。平成29年度の学校の管理下における熱中症に関しての発生状況は、合計4,940件発生しており、内訳は幼稚園7件、小学校408件、中学校2,038件、高等学校2,467件、高等専門学校20件となっており、その対策についてはまだ不十分だと考えられる。平成28年度比では中学校と高校で増加し、幼稚園、小学校、高等専門学校では減少している。

日本スポーツ振興会（2013年）によると、熱中症はスポーツ種目別に発生件数で見ると、屋内競技種目は31%でバスケットボールやバレーボール、屋外競技種目は69%で野球、サッカー、陸上競技、テニスが多くを占めており、屋内外を問わず指導者は最善の注意を払う必要がある。発生時の内容は、中学校、高等学校とも運動部活動で約70%、以下体育祭、競技大会、体育の授業となっており、運動する際には水分補給や体調観察をこまめにすることも当然ながら大切なことである。運動時の水分の補給の仕方については、自由に水分補給ができる環境が望ましく、受講者から、指導者は生徒が自由に水分補給や指摘し合える雰囲気が必要であるとの意見もあるため、現場の教員はコーチングなどの力量を備えていたほうが望ましい。

今回の講習において、課題1の「部活動中の熱中症の発生を防ぐための注意点を挙げなさい」については、「できるだけ水分をこまめに摂るように声かけをする」などの水分・塩分補給(28件)、「活動開始前のミーティングでの生徒の体調の把握」などの健康管理(30件)、「休憩時間の確保」などの練習(場所など)の工夫(25件)、「その日の温度や湿度をチェックし、生徒にも周知する」などの温度管理・環境(18件)、「通気性のよい恰好をさせる」などの(練習時の)服装(10件)、「部活動中の生徒観察をしっかりと行う。少しでも様子がおかしければ休ませる」などの監督やコーチなど指導者の注意点(7件：高校のみ)、「家庭で保護者が子どもたちに食事をしっかりとらせる。又、睡眠時間もきちんととらせる」などの家庭との連携・協力(9件)等であった。

以上のように、指導者の立場から生徒、保護者、教員間の連携協力の重要性について幅広い内容が網羅されている。特に、休憩に関する内容は、一昨年度の研修に指摘がなかった項目で、「練習メニューの変更」、「練習メニュー量と休みの適切なバランス」、「状況に応じて、休憩時間をとる」、「休憩」が挙げられた。

また、課題2の「自分の日常生活の中で、安全を確保する活動を探し、具体的な例を挙げなさい」については、「備品の管理・チェック」などの安全の点検(37件)、「廊下や階段でふざけたり、走り回っている生徒に注意をする」などの子どもに対する安全(53件)、「緊急時シミュレーション：重いてんかんやアレルギー等の児童に対するシミュレーション。職員で情報を共有」などの職員の情報共有(44件)、「月1度の夜間パトロール・地域と連携した夜間パトロール(小・中・高・PTA)」などの連携・協力(45件)、であった。

昨年比で増加している項目は、学校と地域の連携・協力及び職員間の情報共有であった。実際、事件・事故は学校内外のいたるところで発生し、その範囲は広範で、地域や関係機関との連携も必要である。山本(2015)も、川崎市で発生した中学生殺害事件で文科省が事件後に立ち上げた「川崎市における中学一年生殺人事件に係るタスクフォース」の報告書の中で、事件を未然に防ぐことができなかった要因の一つとして、学校、家庭、地域、行政の連携の重要性が不十分であったことをあげている。具体的には、①学校が情報共有にとどまり、早期対応ができなかったこと、②教育と福祉からの学校支援ができなかったこと、③被害者へ迫っている危険性に周囲の大人が気づかなかつたこと、④学校と警察の間で非行少年に関する情報交換の仕組みが整っていなかったこと、の4点を指摘している。学校教育は、児童生徒の活動範囲が広がる中で、学校内の対応に加え、学校外における関係機関相互の連携が益々重要となってきている。

文部科学省(2009年)は、事故対応をめぐる課題と研修の重要性について、「重大事故においては、学校の対応をめぐる保護者と深刻な対立に至ってしまう事例も少なくない。また、事故後の検証で、教職員の知識不足や訓練の不十分さなどさまざまな問題点が指摘されている」と示

している。そして、「学校事故を防ぐためには、現状では教職員研修がきわめて重要な役割を果たす」と述べている。

学校管理下の範囲は広く、かつ学校側の負う責任は重くなっており、教職員に対する研修の在り方や管理者のリーダーシップがより求められている。

6. まとめ

幼稚園教員は、保育所や幼稚園において、「スキンシップを多めにして、体温を確認」などの健康管理、「保育だよりの発行」と「生活リズムチェックシート」等保護者との連携等、安全課題が具体的な計画で対応されていることが伺える。また、「園庭は毎日、職員が危険はないかチェックしている（芝生は裸足で遊んだりするため）」、「安全チェックリストの記入、確認（月毎）、遊具等（毎日）」、「施設、設備に関する定期点検の実施」、「落下物防止（棚の上においてあるものを固定する）」などの安全点検、確認がなされていることが理解できる。

校種ごとの特徴については次のようにまとめることができた。

渡邊(2013)は幼児期の安全課題として、①幼児の障害となる原因の事故は、転倒、衝突、転落が上位、②幼児期の安全教育では、具体的な事例をもとに指導、③周囲の大人による適切な安全管理が非常に重要、などを述べている。

小中学校教員は、「教育相談（学期ごとに1回、教師と子どもと個人面談）」などの職員間の情報共有、「不審者情報の共有（委員会、警察から情報がくるのでそれを子どもたち、保護者に連絡する）」、「夜間パトロール（夏休み、PTAと実施）」などを述べている。このことは、連携協力を通して、安全課題に対応していることが理解できる。

渡邊(2013)は小学校における安全課題として、①行動の原因と結果の予測に関する心理的発達は、危険の回避という視点から重要な要素、②規範意識も高く、大人による指導を率直に受け止める時期などを述べている。また、中学生の安全課題として、①危険行為には、親から自立し、仲間を得るための手段としての側面、②被害者だけでなく、加害者になる危険性、などを述べている。

高校教員は、「中断させる勇気」、「常に指導者側の認識」、「指導者の情報収集：熱中症対策に関する知識を身につける（新しい情報収集）」、「（熱中症の時）対話による意識確認」、「計画を柔軟に」など監督やコーチなど指導者の注意点に関する内容、「講習会等で熱中症の怖さを理解させる（未然防止、生徒同士でも観察できるように）」の熱中症についての知識に関する内容、「生徒の登校時、下校時に注意喚起（イヤホンして自転車に乗らない等）」などの生徒指導に関する内容、「薬品管理の徹底」など教科に関する内容が挙げられていた。このことは、中学校までの指導を行動範囲が拡大するにつれて生徒個人が理解及び対応することの必要性を示している。そのために、教員や指導者が多くの領域について対応していることも理解できる。

渡邊(2013)は高等学校における安全教育について、中学生までの教育を発展させ、かつ社会の安全活動も含むようにすることが大切であると述べている。

全校種の教員が一堂に会し、学校安全と危機管理に関する情報を共有することのメリットとして、①幼児児童生徒の心身の発達の特徴や安全に関する課題を等の理解を深化させることができる、②全校種の教員が連携協力を図ることができる、③課題等を校種ごとの短期スパンではなく、発達を通じた長期スパンで理解することができる、等があげられる。

一方、デメリットとして、①特定の校種に特化した課題について議論を深めることが難しいことが考えられる。

受講者のアンケート調査の結果によると、「学校現場が直面する諸状況や教員の課題意識を反映して行われていた」、「講習のねらいや到達目標が明確であり、講習内容はそれらに即したもの

であった」、「受講生の学習意欲がわくような工夫をしていた」の総合評価は、「よい（十分満足した・十分成果を得られた）」が24名（77.4%）、「だいたいよい（満足した・成果を得られた）」が7名（22.6%）であった。また、「教職生活を振り返るとともに、教職への意欲の再喚起、新たな気持ちでの取り組みへの契機となった」等の総合評価は「よい」25名（80.6%）、「だいたいよい」6名（19.4%）であった。このことは、本講座が参加した教員から肯定的な評価を受けたものと考えられる。

今後、教員免許状更新講習において、全校種の教員が同一の講習を受講することのメリットとデメリットを精査し、講義内容の精選、実施方法等を検討する必要がある。また、「学校安全」や「危機管理」について、実効性と効果性のより高い講習内容を提供していくことが必要であると考えられる。

参考資料

1. 飯塚峻, 学級担任の危機管理 A～Z, 図書文化, 1997
2. 角替晃, 必携! 教師のための個人情報保護実践マニュアル, 教育出版, 2005
3. 梶田叡一, 山極隆, 教育の最新事情, ミネルヴァ書房, 2009
4. 齋藤歎能, 学校安全と危機管理, 大修館書店, 2006
5. 下地敏洋, 多和田実, 学校における学校安全と危機管理に関する一考察－教員免許状更新講習の事例検討からみる現状と課題, 琉球大学教育学部附属教育実践センター紀要, 25, 2018
6. 渡邊正樹(編著), 学校安全と危機管理(改訂版), 大修館書店, 2013